

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463384

研究課題名(和文) ナラティブ・アプローチによる育児困難乳幼児の祖父母支援の検証とガイドラインの創生

研究課題名(英文) Verification of support for grandchildren with special needs by narrative approach and creation of guidelines

研究代表者

石井 邦子 (Ishii, Kuniko)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：70247302

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：養育上の特別な配慮を要する乳幼児の祖父母と家族に対し、自身と家族の体験の再構成と価値づけを目的とした小冊子記入と面談によるナラティブ・アプローチを実施し、効果を検証した。「体験の想起」は小冊子記入前から始まり、面談により具体化した。「体験の再構成」「体験の価値づけ」「過去の自分の価値づけ」「過去の家族の価値づけ」は、出来事について語り、出来事に対する家族の気持ちや受け止めを知るにより起こった。「未来の自分または家族の価値づけ」は、価値ある自分たち家族の体験を誰かのために役立てたいとの希求に繋がった。検証結果に基づき、支援方法を改良・具体化し、ガイドラインを作成した。

研究成果の概要(英文)：Regarding grandparents and families rearing infants with special needs, entering of booklets to reconstruct and evaluate the experiences of the subjects and their family members and a narrative approach survey was conducted, and effects verified. "Recall of experiences" began before the subjects began making entries in their booklets, and was embodied through the interviews. "Reconstruction of experiences," "evaluation of experiences," "evaluation of myself in the past," and "evaluation of my family members in the past" were embodied by their talking about the experiences and becoming aware of the feelings and response of their family members to those experiences. "Evaluating my future self or family members" lead to the aspiration of making use of the valuable experiences of family members to others. Based on our verification results, we improved and specified the supporting methods and created guidelines.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：ナラティブ・ケア 乳幼児 育児支援

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国では、乳幼児の育児が祖父母の協力のもとに行われる伝統的スタイルが今もなお一般的である。にもかかわらず、祖父母は母親の育児のサポート者と捉えられ、祖父母自身の Well-being に着目した報告は少ない。これは、育児に特別な配慮を要する乳幼児(以下、育児困難児)においても同様である。祖父母にとって、育児困難児を受容し、育児困難児の祖父母である自分自身を受容し、孫育児を担う役割を達成することは重要な発達課題であるにもかかわらず、祖父母自身の役割達成や Well-being の支援は、未だ報告されていない。

(2) 我々は、育児困難児の祖父母特有の体験が「孫の疾病や障害に強い衝撃を受けて苦しみ、徐々に回復・安定へと向かいつつも希望と落胆の間を揺らぎ続け、一方で、息子/娘夫婦を直接的・間接的に支える立場に身をおき続け、常に息子/娘夫婦を気遣い見守る」ことを明らかにし、「ありのままを受け止め、自分らしく孫育児を行い、家族間の情緒的きずなや家族機能の安定に自分自身が関与していると自ら実感し価値づけられるような看護」が必要との結論に至り、ナラティブ・アプローチによる孫育児支援プログラムを開発した。ナラティブ・アプローチは、患者・当事者が自らの体験を語ることによって、体験を再構成して意味づけ、新たな価値を作り出す作業であり、近年、医療や社会福祉の分野で用いられている。

(3) 開発した育児支援プログラムの効果の実証は、対象特性の偏りや看護スキルとの因果関係が不明瞭であることから限定的であったため、育児支援プログラムの普及・定着には至っていないのが実情であった。

### 2. 研究の目的

(1) 先行研究で開発した孫育児支援プログラムを、支援目標達成状況、看護者のスキル、マネジメントの視点から多元的に検証し、プログラムの効果を明らかにする。

(2) 孫育児支援プログラムの普及推進のためのプログラムの実施・管理方法を検討し、ガイドラインを創生する。

### 3. 研究の方法

本研究は4つのプロジェクトで構成された。【研究】孫育児支援プログラムにおける目標の達成状況の検証、【研究】孫育児支援プログラムにおける看護スキルの抽出、【研究】孫育児支援プログラム実施に関するマネジメント上の課題抽出、【研究】孫育児支援プログラムガイドラインの創生、であった。

(1) 孫育児支援プログラムにおける目標の達成状況の検証【研究】

対象：疾病、障害、発育上の問題に関連する育児上の特別な配慮を必要とする乳幼児

を養育している家族であり、主たる養育者である親と共に、日常的に何らかの形で育児に参加している祖父母や親族がいる家族。祖父母のみならず、その家族をも包含した形で提供することが、家族の力を強め、家族の健康や家族機能の円滑化に効果的と考え、家族を対象とすると計画を変更した。

#### 孫育児支援プログラム

目的：乳幼児の家族が、自分自身と家族の体験を再構成し、過去と未来における自分自身と家族の人生・生活・いのちの価値づけ(価値の再認識および新たな価値の発見)ができる。

方法：ナラティブ・アプローチ法による。乳幼児の親および祖父母や親族が、自分自身および家族の体験について想起して小冊子に記載し、看護者が小冊子への記載を基に面談を行った。小冊子は、家族構成、家族の紹介、家族に起こった特別な出来事、家族とこれからの自分へのメッセージ等で構成された。面談は、乳幼児の親および祖父母や親族を含む参加可能な家族による集団面談とし、面談ガイドに沿って記載内容を確認しながら、記載内容の反復や補足の語りを促すように、オープンクエスチョンやミラーテクニックなどのファシリテートスキルを用いて実施した。当初は祖父母に対する集団アプローチを計画していたが、家族を対象とするとの変更に伴い、個別アプローチに変更した。

看護者：研究協力機関において、育児上の特別な配慮を必要とする乳幼児とその家族に対する看護実践経験を10年以上有する者とした。

#### データ収集方法

プログラムへの反応をデータとした。小冊子はコピーを取った。面談は録音して逐語録を作成した。

#### 分析方法

面談の逐語録から、プログラムの目的に関連した部分を抽出し、質的に分析した。

(2) 孫育児支援プログラムにおける看護スキルの抽出【研究】

分析素材：【研究】で作成した孫育児支援プログラム実施中の逐語録及び小冊子の写し。

分析方法：【研究】で抽出されたプログラムの目的に関連した部分を抽出し、変化をもたらした看護者の発言、文脈や前後関係を記述した。

(3) 孫育児支援プログラム実施に関するマネジメント上の課題抽出【研究】

対象：【研究】を実施した看護者および研究協力機関の看護管理者

#### データ収集方法

プログラムの成果及び実施に関する集団面接。対象者が【研究】のデータを熟読し、プログラムの目的の達成状況とそれ以外の対象者の反応について討議した。

## 分析

集団面接の逐語録から、プログラムおよび看護マニュアルの改善、看護者のスキル、マネジメントについて抽出し記述した。

### (4) 孫育児支援プログラムガイドラインの創生【研究】

#### 研究成果の統合

【研究】【研究】【研究】を基に、孫育児支援プログラムの実施方法及び管理方法のガイドライン試案を作成した。また、プログラムを実施した看護者及びプログラムに参加した家族化会プログラムの主観的評価を聴取し、ガイドライン試案に反映させた。

孫育児支援プログラムガイドライン試案に関する意見聴取

【研究】【研究】の対象者に孫育児支援プログラムガイドライン試案を提示し、意見を聴取し、意見に基づき試案の妥当性の検討と修正を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 孫育児支援プログラムにおける目標の達成状況の検証【研究】

6組の家族が研究に参加した。1組は、家族の希望により面談のみを実施した。

「体験の想起」は、小冊子に記入する「家族に起こった特別な出来事」を決定する段階から始まり、出来事について語ったり、出来事に対する家族の気持ちに対する自身の思いを語る中で具体化された。「体験の再構成」、「体験の価値づけ」、「過去の自分の価値づけ」は連続的に起こっており、出来事について語る自分自身の言葉、または出来事に対する家族の気持ちや受け止めを初めて知ることがきっかけであった。

小冊子の記入を通して自分自身の内面でこれらが行われたことを面談で語る場合もあった。「過去の家族の価値づけ」は、出来事に対する家族の気持ちや受け止めを初めて知ることにより、改めて家族の価値に気づくことが多かった。「未来の自分または家族の価値づけ」は、最終的に価値ある自分たち家族の体験を誰かのために役立てたいと希求することに繋がっていた。

以上の結果から、過去の体験について「書く」「語る」という作業と、過去の体験に対する感情や受け止めを家族内で共有することが、過去の体験を再構成し、過去の自分と家族の価値を見出し、自分と家族が「誰かの役に立てる」価値のある存在であるという実感をもたらしたと考えられる。

### (2) 孫育児支援プログラムにおける看護スキルの抽出【研究】

ナラティブケアの効果は、対象が置かれている状態に左右されていたことから、対象者の条件と看護者の条件を対で提示することとした。対象は、以下のふたつに該当する場合、効果が大きかった。育児上の特別な配慮

を要する乳幼児の育児や養育に関わる家族。乳幼児の父母や祖父母に限らず、日常的に育児にかかわっていたり、家族の特別な出来事を共有する親族を含む。症状の軽快や安定、治療の終了、退院決定や在宅療養への移行など、乳幼児の治療や療養が一段落し、次の段階に進む節目を迎えており、そのための支援を必要としている家族。尚、乳幼児の状態が安定していない、育児生活・療養生活の変更などの時期にある家族はケアの効果がみられにくいと考えられた。

看護者の基準は、育児上の特別な配慮を要する乳幼児とその家族に対するケア（退院支援、育児支援など）に関する十分な看護実践経験を有し、家族のアセスメント能力および家族・集団を対象としたコミュニケーションスキルを有している。乳幼児と家族が受ける看護サービスに従事し、乳幼児や家族との信頼関係が構築されている。とした。

### (3) 孫育児支援プログラム実施に関するマネジメント上の課題抽出【研究】

看護スキルを有する中堅以上の看護者がケアを行う必要性が認められたことから、面談は40～60分とすること、保険点数加算が実現すると定着しやすいことが明らかとなった。

### (4) 孫育児支援プログラムガイドラインの創生【研究】

【研究】【研究】【研究】を基に専門家会議を実施し、「育児に特別な配慮が必要な乳幼児の家族に対するナラティブケア・ガイドライン - 小冊子『家族のあゆみ』の活用 -」を作成した。ガイドラインはA4サイズ8ページにわたり、「研究の概要」「ナラティブケアの概要」「小冊子『家族のあゆみ』の構成」「面談の実際」「ナラティブケアの記録と継続支援」「ナラティブケアQ&A」で構成され、研究代表者が管理するホームページ上で公開した。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

石井邦子、育児上の特別な配慮を要する乳幼児の家族に対するナラティブ・アプローチによる看護介入の効果、第36回日本看護科学学会学術集会、2016年12月11日、東京国際フォーラム（東京都千代田区）

〔その他〕

ホームページ等

研究成果の公表：

[http://square.umin.ac.jp/cpuhs-mm/activity/pdf/h28\\_career/guideline.pdf](http://square.umin.ac.jp/cpuhs-mm/activity/pdf/h28_career/guideline.pdf)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石井 邦子 (ISHII Kuniko)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：70247302

(2)研究分担者

佐藤 紀子 (SATO Noriko)  
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授  
研究者番号：80283555

北川 良子 (KITAGAWA Ryoko)  
千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師  
研究者番号：80555342

(3)研究協力者

荒木 暁子 (ARAKI Akiko)  
小池 幸子 (KOIKE Sachiko)  
水野 芳子 (MIZUNO Yoshiko)  
市原 真穂 (ICHIHARA Maho)